城山エコミュージアム通信

令和３年（２０２１）１月３１日　第３９号

エコミュージアムとは、エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）を合わせた造語で、その地域そのものが、生きた貴重な資料であるという考え方の下に、地域の歴史や文化、自然について学び、地域への愛着を深め、交流を深めていく活動です。

初春を祝う
～金刀比羅宮～

（初日の出　左下に霞むランドマークタワー）

標高約３５０ｍの雄龍籠山にある金刀比羅宮は、元旦祭の1月1日、初日の出を拝もうと大勢の参拝者で賑わいます。奥の院へと向かう途中、大きく展望が開け関東平野が一望できます。太陽は横浜のランドマークタワー右手あたりから赤々と昇ります。当日、鳥居下では小松地区の囃子連の方々による獅子舞やお囃子が奉納され、新春の喜びを一層感じられます。

春季例大祭は4月第1日曜、秋季例大祭は10月第1日曜に催されます。

金刀比羅宮の建つ一帯は小仏層群という高尾山の西にある小仏峠からとった名の、泥岩や粘板岩、コウ砂岩、千枚岩などからできている神奈川県内で最も古い（中生代）岩石からできています。

（新版神奈川県地学ガイド・コロナ社発行）

（境内にある雨乞いの池）

辰の日に雨乞をすれば巳の日に降雨し、池さらいをすると大荒れになると言い伝えられている。

境内には、山頂付近にも関わらずどんな干ばつにも涸れることがないという湧水の池があり、雨乞いも行われていました。水や龍神との関係の深い金刀比羅宮を祀り水難除けや雨乞いの霊験を願ったのでしょうか。金刀比羅宮は、文化元年（１８０４）8月、町域内小松で手広く酒、雑貨を商っていた伊勢屋廣田善兵衛が発起人となり、村内町屋の有山兵四郎、杢代兵衛、中島市兵衛、落合繁八、佐藤文弥の5名が讃岐（香川県）の金刀比羅宮へ参詣し祭神を勧請したのが始まりといわれています。（城山町史６通史編近世第2節　村と神社）

御神木は池のほとりにあったミズメ（＊）でしたが、2011年、台風で倒れてしまいました。また、境内にあった旧城山町保存樹木に指定されていたヒノキの大木も2018年の台風で倒れ、社務所や鳥居なども被害にあいましたが、2回とも奇跡的に社殿は被害を受けていません。霊験あらたかなるエピソードです。

（田畑 房枝）

＊ミズメ：カバノキ科カバノキ属
樹皮に傷をつけると樹液が水のように流れることから水芽の名がある。ミズメの枝は弾力性が高く古来より儀式に用いる「梓弓」に使われ、別名、アズサ、アズサカンバ、ヨグソミネバリ。
（樹皮・葉でわかる樹木図鑑　発行成美堂出版　監修菱山忠三郎）

今回のトピック　■特集記事「初春を祝う」■城山探訪「どんど焼き」　■しろやまミニ図鑑「フユノハナワラビ」　■活動報告「リモートで学習会・道志川について」■城山検定　■インフォメーション「ガイドマップ改訂版について」ほか

城山探訪

どんど焼き

「どんど焼き」とは、小正月の１月15日に、その年の正月に歳神様（としがみさま）を迎えた門松やしめ飾りを燃やし、歳神様を天へ送るための火祭りとされています。

その年の五穀豊穣や商売繁盛、家内安全、無病息災、子孫繁栄を願った行事で、その火で焼いた餅や団子を食べると病除けになる、書初めを燃やして火が高く上がると字が上手になるなどと言われています。

写真は小松自治会のどんど焼きの櫓(やぐら)です。小松地区では年の初めの大きな行事として、自治会の老若男女が一堂に会してどんど焼きと新年のつどいを合わせて行います。お囃子の賑やかな音色が響く中、手作りの料理が振る舞われ、陽が傾き始めた頃にいよいよ点火。炎が高く燃え上がり、無病息災、家内安全などを願います。育成会の子どもたちが作った団子を三つ又に分かれた梅の枝に刺して焼き、食べれば病除け。お腹も心も満たされて、和やかに閉会となります。

（金子 直美）

参考文献：「令和元年度城山エコミュージアムのつどい」冨田広氏講演資料

お年始について

「下椚田村狭間　鈴木日記より」

日記の記述はじめに「三日　天気　相州小松并相原村へ年礼ニ参ル」とあり、毎年三日は小松村（城山地区）に年始に行っている記載があります。嘉永2年（1849）三日の記述に

「一、上半紙二状・手拭壱筋・鰹弐本　忠助江

一、上半紙壱状・扇子弐本ツ、友次郎・勝五郎」

とあり、他の年も同じように年始に持参しています。年賀には手拭いや扇子は時々で変わりますが、半紙は不可欠だったようです。

＊鈴木日記の筆者は、上窪田組に所属する千人同心であり下椚田村の年番名主をつとめた鈴木佐次右衛門。日記は天保15年（1844）から明治20年（1887）まで残存している。（八王子資料館編集）

（田畑 房枝）

しろやま ミニ図鑑

フユノハナワラビ

（ハナヤスリ科ハナワラビ属）

（胞子葉と栄養葉）

（胞子葉）

秋も深まってきた頃、林のこもれびの一画に黄金色のひとむれがありました。近づいてみるとワラビのような葉に鬱金色（うこんいろ）の花のようなものを咲かす、なんとも不思議な植物が群がり生えていました。

図鑑で調べると、フユノハナワラビというシダ植物と分かりました。よく目にするシダ植物は葉の裏に胞子をつけますが、フユノハナワラビは、一株に葉の形をした栄養葉と、胞子をつける胞子葉をもっていて、栄養葉より胞子葉の方が高く伸びるので、ちょうど花のように見えるのです。

フユノハナワラビは花の少ないこの時季の、森の貴重な華やぎです。

（多羽田 啓子）

活動レポート

＜道志川・三太物語をテーマに活動＞

「リモート学習会を試行しました」

10月7日と11月4日の2回、自宅側（発表者含む）と公民館側の参加者でZoom（ズーム）を使い、道志川・三太物語をテーマにしたリモート学習会を試行しました。

発表者が作成したパソコンデータをZoomを使い参加者側のパソコンに映し出して説明した後、参加者側と討論を行いリモートでの学習会の有効性を確認しました。

道志川 ・ 三太物語 発表概要

道志川は、山梨県山中湖村と道志村の境の山伏峠付近に水源があり道志七里を下り山梨県（甲斐国）、神奈川県（相模国）の県境の両国橋において相模原市緑区に入ります。さらに下って津久井湖にて相模川と合流します。

道志のいわれは平安時代初期に検非違使（けびいし）の道志という役人がこの地を治めたことから地名がついたという記録があります。この他、源平の戦いに敗れた平家の落ち武者がこの山中に隠れ住んだとか、武田氏滅亡の際、次々と山伝いに逃れてきた姫が、かなわず自害したことから、姫次という山の名がついたという言い伝えがあります。更に道志川下流、道志橋付近を舞台にした小説「三太物語」を伝える三太旅館もあり、道志川はその清流と共に歴史と文学のロマンを伝えております。（春日 修）

（道志川水源付近）

（道志橋と
手前に旧道志橋の橋脚跡）

参考、出典文献：
相州内郷村話、鈴木重光　大正12年5月
津久井町郷土史　　昭和62.3
道志七里　伊藤堅吉
津久井歴史ウオーク　　前川清治　2003.3

「ミニツアー報告」

11月18日水曜日、晴れて気持ちの良い秋の一日、リモート学習会のテーマを受けて委員５名で現地を歩いてみました。

青山公園を起点に弁天橋、横浜水道の沈殿池、導水隧道入口、旧道志橋の橋脚跡などを見ました。

弁天橋のたもとには、神奈川県で一番古い小仏層群の岩盤が露出していました。（新版神奈川県地学ガイド・コロナ社発行）

三太旅館では、昭和25年に始まったラジオ放送「おらあ三太だ」ではじまる三太物語の作者青木茂氏について、館主の方からお話をうかがったり敷地内にある石碑などを見せていただきました。（田畑 房枝）

（旧道志橋近くの
三太物語
説明板）

城山検定

問　題

一年に２回「はな」をつけるこの植物の名前は何でしょう？

はな（花）
９～10月

はな（華）
12～1月

城山検定 解説

答え
◇ シモバシラ ◇

シモバシラはシソ科の多年草で、一年に２度　はな（花・華）をつけます。最初は９～10月頃に花穂にたくさんの小さな白い花を咲かせます。

２度目は12月中頃～1月の強く冷え込んだ朝、茎の根元付近に二つと同じ形のない白く神秘的な氷の華（結晶）をつけます。

この植物は、冬になって落葉してからも根から水を吸いあげ、12月中頃になって空気が強く冷え込むと、水を含んだ茎が凍結し体積が膨張します。その時、茎の一部が裂け水が外に弾けると寒さで凍結し、右図の氷の結晶が出来ます。これを霜柱に見立てて名前がついたと言います。若葉台周辺でも見られます。

（塩谷 弘道）

（写真は氷の華の例）

参考資料：野草の名前　（山と渓谷社）

INFORMATION

【　城山エコミュージアムの旅　】
相模原市緑区城山地区
城山エコミュージアムガイドマップ
改訂版　発行のお知らせ
＊ただいま改訂版を作成中。
令和３年３月末発行予定です。
お楽しみに！

＝行事中止のおしらせ＝

城山エコミュージアム通信38号でご案内しました「城山エコミュージアムツアー」（10月４日）は、新型コロナウィルス感染症に配慮し中止しました。また、令和3年2月に予定していました「城山エコミュージアムのつどい」も同様の理由で中止いたします。

募集

委員会では、地域を学び地域の魅力を発掘・発信する活動に興味がある方、募集中です。ご一緒に活動しませんか？お気軽に公民館までお問合せ下さい。

城山エコミュージアム通信38号の記事訂正とお詫び

第38号では紹介記事として川尻八幡宮、八幡宮古墳について紹介しましたが、記事の執筆にあたり引用及び参考にした文献の出典の明記と一部誤記がありました。訂正しお詫び申し上げます。

・出典：春林文化第３号「川尻八幡宮の歴史とその謎を追う」著者 山口 清（城山地域史研究会）
　なお、１頁６行目の「慶長８年（１６０３）」から９行目「あったと思われます。」までの記述は上記著書からの引用です。

・訂正：２頁表題　川尻八幡宮古墳　→　（正）川尻八幡宮境内古墳
　　１行目　横穴式石室古墳　→　（正）古墳石室
　　４行目　八幡宮がある一帯には100基ほどの横穴墓や→(正)八幡宮の近くには横穴墓や

編集後記

2020年はコロナ禍に終始した一年でした。2021年はどんな年になるのか想像しにくいのですが、新春を祝い良い年になるよう願って編集しました。コロナ対策は続きますが、幸い自然に恵まれた城山地域ですので工夫して委員会の活動を進めていきたいと思います。新しい発見ができますように。　（田畑 房枝）

企画/作成
相模原市立城山公民館**城山エコミュージアム委員会**
発　行：相模原市立城山公民館
TEL：042-783-8194【直通】
FAX：042-783-1721

ホームページをパソコンで見る時は
相模原市　城山エコミュージアム → 検索

相模原市立城山公民館ホームページ　http://www.sagamihara-kng.ed.jp/kouminkan/shiroyama-k/index.html